科学的教育グループ SEG〈授業レポート〉

多読・多聴を基本に楽しみながら英語の力を伸ばす

1981年に創立された科学的教育グループ SEGは、「学ぶ楽しさ・達成する楽しさ」を重視した授業を展開する、中学生・高校生を対象とした進学塾です。今回は、外国人講師とのオールイングリッシュの授業で聞く力・話す力をつけるとともに、英語の本を多読・多聴する「英語多読コース」の授業を取材しました。

クイズ形式などで楽しく展開 オールイングリッシュの授業

英語多読コースの授業は、外国人講師によるオールイングリッシュの授業と日本人講師による多読の個別指導・シャドーイング指導の２部で構成されています。今回取材したのは中1英語多読Ｃクラスの授業で、洋書がぎっしりと並ぶ本棚に囲まれた教室には、14名の生徒が集まっていました。

オールイングリッシュの外国人パートを担当するMark先生は、カナダの大学で言語学を研究してきた経歴を持ち、その知見をベースに楽しく自然に英語を学べるように80分のプログラムを組み立てています。

まず始まったのは値段当てクイズです。“Do you like money? Yes or no?”などと軽快なテンポで話しかけながら、生徒を２～３人ずつのグループに分けていきます。そして、例題として“This bottle of carbonated water, How much do you think this costs?”と炭酸水の入ったボトルの写真を見せ、1円、100円、1000円の選択肢から選ばせます。生徒たちは自信満々で正解の100円を選択しますが、本番になると問題が難しくなり、「浅草からお台場までの水上バスの大人料金」「イギリスの制服のスカートの値段」などが問われていきます。解答に戸惑う生徒たちに、Mark先生は“Some of you may be surprised to hear that this school uniform is not so expensive.”といったヒントを出していきます。知らない単語があっても、どれも身近な話題なので、文脈を追えば自然に理解できるようになっています。チーム対抗で正解数を競ううちに、生徒たちの緊張も徐々にほぐれ、発言も活発になっていきました。

クイズを楽しんだ後は、「プリントを見ながら仮定法過去形のルールを学ぶ」「英語のアニメを視聴し、その内容を英語で確認する」といった内容が展開されました。

一般的な英会話スクールと比較すると、発言が求められる回数は少なめに思われますが、実はそれには意図があります。十分に英語を理解していないうちに発話を強制すると、英語が苦手になってしまうケースも少なくないため、まずは自然な文脈の中で楽しみながら語彙や文法の基本パターンに数多く触れ、日本語に訳すことなく理解し、習得することを重視しているのです。

習熟度や好みに合わせた英語の本を辞書を引かずにたくさん読む

休憩時間をはさみ、日本人講師による多読パートが始まると、教室の空気は一変し、静寂に包まれます。最初の５分間、生徒たちは英作文のプリントに取り組み、その間に担当のSEG代表・古川昭夫先生が英語の本とCDプレーヤーを生徒に配っていきます。注目すべきは、配られる本が一人ひとり異なること。SEGが用意した58万冊の洋書の中から、その生徒のために先生が選んだものです。

多くの英語の本の中から、生徒の習熟度や好みに合わせて選書したものを手渡す古川先生

英作文を終えた生徒は、机の上の本を読み始めます。付属の朗読CDを聞きながら、あるいは英語を目で追いながらと読み方はそれぞれですが、全員が集中して読書に取り組んでいます。一方、仕上がった英作文は古川先生とチューターが手分けしてチェックします。この英作文で再確認した英語の習熟度と生徒の「読書記録手帳」が、次に配る本を選択する際の手がかりとなります。

この多読の時間が一般的な英語の授業での精読と違うのは、ほとんど辞書を使ったり文法の確認をしたりしない点にあります。SEGでは、第二言語の習得にとって重要なのは大量のインプットであり、リーディングであれば辞書を引かずに読めるレベルの本を大量に読むことが大切だと考えています。そして、それを実現するために、それぞれの生徒にとって95%以上が既知の単語で書かれており、さらにその生徒が読んで楽しいジャンルの本を選ぶことを、講師は心がけているのです。

中1のうちは取り組む本の単語数が少なく、1冊を数分から10分程度で読み終わるため、頻繁に本の補充が必要になります。古川先生は読み進める生徒の様子を見ながら何度も棚から本を選び、生徒に渡していきます。時には「これ、おもしろい?」と声を掛け、反応によっては本を取り換えることもあります。

本を手にした生徒たちは、驚くほどの集中力で読み続けます。一つの空間で、ほかの生徒が英語に向き合う気配を感じながら、自分に適したレベルと内容の本を的確なタイミングで渡され続けるからこそ、80分間も集中力が維持できるのでしょう。その結果、中1春に数十語レベルの絵本からスタートして、冬には数百語、生徒によっては数千語の本を読めるようになります。そして中3・高1になるころには、『ハリー・ポッター』レベルの小説やノンフィクションを読める生徒も出てくるそうです。授業を終えた生徒の一人は、「『読書記録手帳』に毎回読んだ語数や感想を書き込むのが楽しみです。中1の間に累計10万語を読破することを目標にしています」と話してくれました。

Mark先生によるオールイングリッシュの授業の様子。右はアシスタントのLowe先生

「次はこの本にチャレンジしてみよう」という古川先生のことばに、生徒の読書意欲が高まります

多読の軌跡を明確にする読書記録手帳。記録された語数はモチベーションアップにもつながります

楽しくなければ得ることかなわず

英語をはじめとする第二言語を習得する際に重要なのは、自力で理解可能なインプットを相当量、確保することです。たくさん読んで、たくさん聞き、そのうえでアウトプットしたほうが効果も高いと、各種研究で明らかになっています。

そういう意味で、日本の学校教育で足りないのは、量を取り入れることです。学校の授業では、300～1,000語程度の文章を精読することを求められますが、5万語から10万語の本を読める力が土台となって初めてスムーズなアウトプットが可能になるのです。英会話についても、実際に活用する場面では、まず大量に繰り出されることばを聞き取り、理解することが必要です。

こういった大量に聞く力・読む力を養うのがSEGでの学びです。英語多読コースでは、外国人講師による文法の解説・会話演習と併行して、CDを聞きながらやさしい本を読むことから始めて、本のレベルを徐々に上げ、大量の英文に触れながら英語力をつけていきます。自分の好きなジャンルの本を、辞書を引くことなく大量に読み、新しい表現に少しずつ出合っていく。そのことが、結果的に英語力のスムーズな習得につながります。

SEGで学んだ生徒213名の進学実績（2023年度）は、東大28名、東工大9名、京大4名ほか、私大では早大82名、慶大61名など。在籍中に留学して、そのまま海外大に進学した生徒もいます。型を詰め込むのではなく、多読で楽しく自然に理解するという経験が、大学入試やその後の学びに生かされていくのです。

SEG代表
古川昭夫先生

科学的教育グループ SEG®
〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-19-19
資料請求・お問い合わせ
TEL. 03-3366-1466
月～金 14:00～21:00 土 13:00～21:00
www.seg.co.jp